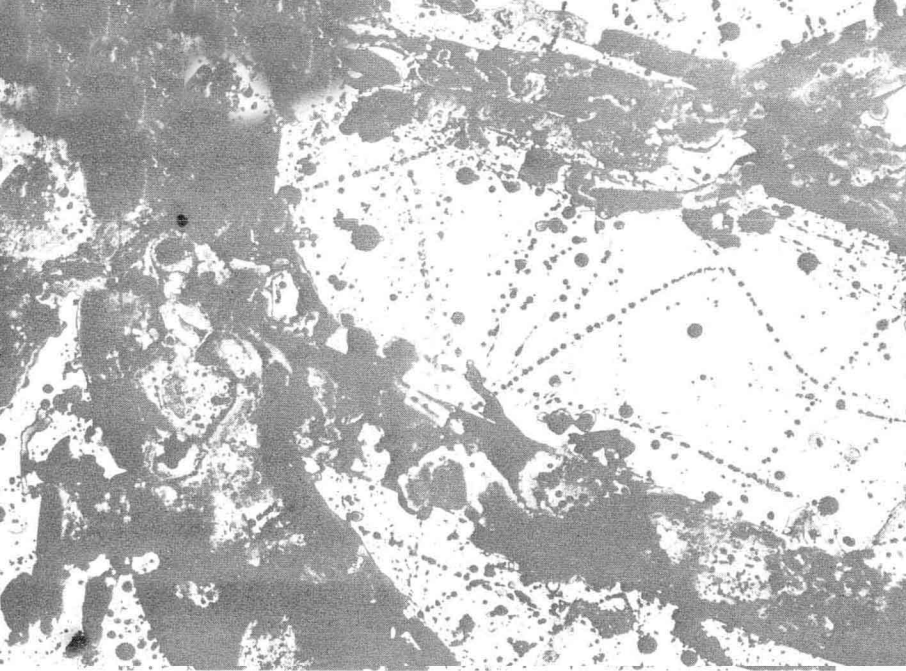


# 火宅の人

檀一雄



火宅の人・檀 一雄・新潮社版



火宅かたくの人ひと

昭和五十年十一月十五日 発行  
昭和五十一年四月十日 二十刷

檀 一雄 (だんかずお)

佐 藤 亮 一

株式会社 新潮社

番号一六二 東京都新宿区矢来町七一  
業務部(三六)五一  
編集部(三六)五四  
振替東京四一八〇八

印刷所 多田印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

定価一五〇〇円

© Yosoko Dan, Printed in Japan, 1975.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

火宅の人  
目次

微 笑  
惑いの部屋  
霧の裂け目  
風の奈落  
野 鴨  
火 宅  
我が枕  
灼かれる人  
吹雪の地図  
蠟 涙  
寂 光

234 207 174 161 147 115 94 82 67 51 7

白  
夜  
帰  
巢  
者  
数  
え  
歌  
楚  
歌  
雲  
に  
鳥  
有  
頂  
天  
黄  
なる  
涙  
わ  
が  
祭  
り  
き  
ぬ  
ぎ  
ぬ  
骨  
キ  
リ  
ギ  
リ  
ス

446   440   423   401   374   357   342   320   297   282   261

装 画     サム・フランス

© SAM FRANCIS: Mexico, 1975.

(大原美術館所蔵)

# 火宅の人





## 微笑

「第三のコース、桂次郎君。あ、飛び込みました、飛びこみました」

これは私が庭先をよぎりながら、次郎の病室の前を通る度に、その窓からのぞきこんで、必ず大声でわめく、たった一つの、私の、次郎に対する挨拶なのである。

こんな時、次郎は大抵、マットレスの蒲団の上から、ずり落ちてしまっている。炎天の砂の上にひびしになった蛙そっくりの手足を、異様な形でくねらせながら、畳にうつ伏せになっていたり、裁縫台の下に足をつっ込んでいたり、しかし、私の大声を聴くと、瞬間、蒼白な顔のまん中に、クッキリとした喜びの色を波立たせて、「ククーン」と世にも不思議な笑い声をあげるのである。

どんなに泣きわめいている時でも、むずかっている時でも、この「第三のコース、桂次郎君……」を私が怒鳴ってやりさえすれば、次郎の泣き声は、立ち所にビタリとまっつて、その顔に類い稀な鎮静の微笑が湧く。

この「次郎微笑」は、人間と云ういきものの微笑には余り似ていないかも知れぬ。しかし、愚かな私にとっては、モナ・リザの微笑より、大英博物館の鼻欠け美人の微笑より、何層倍も正しく、また美しくさえ感じられる。まったくのところ、これが私の鎮魂のよりどころだと云っても、決して云い過ぎではないだろう。

この五六年、私はほとんど自分の家によりつかないのである。それでも、やっぱり、一月に一度、二月に一度は、矢も楯もたまらなくなつて、次郎の側にかけつける。しかし、まともに、次郎の病室の中に入り込むだけの勇氣はなく、庭の方から病室の窓の手摺につかまりついて、「第三のコース、桂次郎君……」大声でわめき散らすのが精一杯だ。

大抵の場合、次郎はマットレスの上から墜落してしまっている。また、大抵、うつ伏せ。ねじれた四肢と、よく動かぬ首が、しばらくもつれ合い、それでも何となく私の声の方に必死にもがきよる気配を見せながら、その呼吸までが荒くなり、グルグルとひとところに旋回をくりかえす。すかさず私が、

「あ、飛び込みました、飛びこみました。ぐんぐんビッチをあげて泳いでおります……」

瞬間、チラと次郎の眼の中に、得意の色が仄見えて、それがやがてゆっくりと、例の次郎微笑に変わってゆくのである。たとえば閑寂の池のおもてに、一粒の小さい石を落すとするだろう……、その波紋が、弱くゆっくりとひろがってゆくように、次郎の蒼白の顔の中のある一点から、(多分眼からだ)喜悅が至極緩慢に波立ちひろがっていつて、その果のあたり、時によって、「ククーン」と云う不思議な笑い声が洩れることがある。

そうだ、「ククーン」。あの笑い声は、ひよっとしたら、馬の笑い声に一番似ているかも知れぬ。

私は兵營の四年の間、主として馬の飼育に専念していたが、馬どもを一通々々、黎明の馬房から曳き出して水を飲ませにゆく時、かりに水勒を握っていてもいなくても、馬は水槽の側までトコトコと歩いていつて、蛇口から流れ出している新しい水をうまそうにすすりあげる。

まだ、しらじら明けの空の光は弱く、蛇口から噴きこぼれる水の音だけが太初のように低いつぶやきをあげて流れ出している静かな時間……。時によって、馬は黎明の星を嚙み込むように、馬面(うまづら)を心持空に反らせ、「ククーン」と笑うことがある。

ひと(いや、ほかの馬)に聞かせる笑い声ではない。暁の空に向つて、ひとりつぶやくような、自足の、満ちたりた、淋しい、幽玄の笑い声なのである。

ひよっとしたら、次郎の笑い声は、あの馬どもの笑い声

に一番近いと云えるかも知らない。おなじように、ひとりつぶやくような、満ちたりた、淋しい、幽玄の笑い声なのである。もう、人に対する笑い声ではなく、太虚に向つて、ひそかに自足しているような、あてどのない響を立てるのである。

次郎が発病してから、もう何年になるか。六つの時に発病して、今が十二三の筈だから、まる六年か、七年にはなるだろう。

日本脳炎。私は大酔している時でも、(いや大酔している時が一番だが)ふっと目の前にその次郎の微笑が大写しになり、「第三のコース、桂次郎君……」わけのわからない大声をあげ、矢庭に闇に向つて駆け出してみたくなくすることがある。

その癖、その次郎は、滅多に帰ることのない石神井の家にほったらかしにして、今でも細君にまかせきつたままだ。

次郎が発病した前後の二三年のことだが、私の身のまわりに、何となくあとあと、凶事が打ち重なってくるように思われた不吉な時期がある。思われただけではない。最後の出来事を別にしてみても、まったくのところ、凶事が殺到したのである。これを簡単な表にして書き抜いてみると、

29年 8月9日 奥秩父ニテ落石ニ遭イ、肋骨三本ヲ折

30年 8月7日 次郎発病、日本脳炎ト診断サル

31年 8月7日 恵子ト事ヲ起ス

見られる通り、ほぼ、きちんと一年ずつの間隔をおいて、私の一身上の重大事が、三年間相續いて起ったことになる。

二十九年の八月は、一郎を連れて、奥秩父の中津川に、出かけていった。人里離れた閑静なところで、一夏泳いでみたり、原稿を書いてみたりしたいのだが、適当なところはないだろうか、と誰彼となく訊いてまわっていたところ、S君がそれなら、奥秩父の中津川に知辺があるからと、わざわざ自分で案内してくれた。

私と一郎はその溪谷のなかに、丁度恰好の泳ぎ場を見つけ出し、しばらく部落に居つくつもりで、金や食糧の罐詰などをこまごまとS君に頼み、S君は山を降っていった。

九日の朝が素晴らしい晴天だったことを今でもハッキリと覚えてゐる。私は一郎と連れ立ちながら、大はしゃぎ、泳ぎ場の方に向って歩いてゐた。自分のくゆらしている煙草の煙が、見事な紫紺の渦巻きになって、溪谷の氣流に乗る。その煙の描く紋様を格別に面白く眺めやりながら歩いてゐた矢先、ズシーンと私の上体にはげしいショックを感じられた。

何だろうと思うよりも早く、私の体はクタクタと崩折れた。崩折れながらも、私の体からはずみ落ちてゆく拳大の

石塊の動きを、ゆっくりと見てとった。

落石である。すぐに血痰が口をついて出た。私は二三時間後に、山の医師から傷口を縫いふさいで貰い、東京から自動車でかけつけてきてくれた友人の壺野や石山博士らに附添われて、その翌日は山を降り、慶応病院に入院した。落石は僅に心臓を左にはずれ、前二本、後一本の肋骨の骨折であつた。

佐藤春夫先生はたわむれに、「ラッキーストライク」と呼んで、私のきわどい運命のツキを喜んで下さったが、まったく危い命を拾ったものである。

次郎が発病したのは、その翌年の八月七日、であつた。

わが家に自慢の出来そうなものは何もない。主人の私の才能は貧しいし、お酒、怠惰、狂躁、濫費、輕薄等……私の悪徳の方を数えあげるなら、たちどころに十本の両手の指を折りつくしたって、とてもそれでは足りないだろう。

それかあらぬか、むかし親しかった友人らにしても、この頃では、誰一人私のところにやって来ようなどと云うものはない。太宰が死に、安吾さんが死んでからと云うものは、私はまるで姨捨の姨みために、荒涼の山奥に棄てられてしまった感じである。

まるっきり駄目なのである。仕事らしい仕事も出来ぬ。

ぜんぜん見とおしというものがない。ヤミクモに書いて、ヤミクモに浪費しているだけで、人間何モノカ……心の眼はチラとも開かず、現代の娼捨は澄み透る月影の片鱗をだに見ない。そう云う私だから、

「子供はなるべく産まない方がいいよ」

とその都度、正直に細君には囁いてきた筈だ。いつ行倒れるか知れやしない。その期に及んで、累を子孫にまで及ぼしたくはないのである。

「でも、不自然なことはしたくありませんし……」

これがまた、その都度、細君が私に答える言葉なのである。私は黙るよりほかにない。細君を説得出来るほどの根拠も自信も、私の方にはある筈が無いのである。根拠も自信もないからこそ、私にしてみれば、産ませることの方が心細く、なるべくなら煩累を自分の死後にまで残して置きたくないわけだ。

数えれば、私の子供はもう四人。長男の一郎が十一年、次男の次郎が五年四ヵ月、三男の弥太が二年六ヵ月、長女のフミ子が一年三ヵ月、この春熱海で流産した四ヵ月の胎児迄が育って今頃生れ出していたとするならば、五人の子供の父親ということになったろう。

いつだったか、石川淳さんが、飲みながら、「もうこうなったら、桂君は手当り次第に子供を産ませるに越したことはないや。一ダースも産んで、日本六十余州を攻め取ってみるんだね」

なるほど、そう思い棄ててしまえばいいそいさぎよいほだ。

雨降り。それが梅雨の頃の雨の日でもあつてみると、私の家はさながら、家鳴り震動すると云つても、決して云い過ぎでも何でもない。机から飛降りる、障子の棧をこわす、襖を破る、いやその襖が理由もなしに顛倒する。いやいや、そんななまぬるい常識的な騒ぎではないのである。何ものとも為体の知れぬ物体が次々と鳴りはじめ、ぶつかり合い、その間に泣き声が混る、金盃が落ちる、土足の犬が踏み上る、碁石が散る、おしっこ、うんこ、いやはやその狂乱怒濤の間隙を縫い歩くようにして、例の不自然なことをしたくないと云うわが家の主婦が、いささか子供らの自然の狂躁に足を取られたあんなばいのヒステリックな声をあげている。

まことにこれが、わが過ぎやすい人生の全貌に近い。

それでも梅雨が晴れ上って、天日がまばゆく照り輝いてくれさえすれば、子供らは次々と地上に滑り降りてくれるから、かりに次郎が金魚鉢の水を甘そうに飲みこんでいようと、弥太が犬の食べ余しを犬皿から手掴みで食べていようと、フミ子が鶏小舎の中で鶏糞にまみれながら這い廻っていようと、彼等のほんとうの泣き声が湧くまでは、その父はホッと一息。そのあたりに珠玉のように輝いている紫露草の美しい紫紺の発色を、思いがけぬ旅情で眺めやっている。が、油断はならぬ。金魚入れの大甕に次郎が逆落し

になつてもがいていたと云うのである。

「もう二寸水が深かったら……」

とその母がズブ濡れの次郎を引連れながら云っている。

かと思うと、口のまわりを糠と粟で糊附けにしたフミ子  
が、ワアワアと泣きながら女中に抱え上げられてやってくる。

「鶏小舎の鶏の餌を残らず食べていらっしやるんですよ」

ヤケ糞の父は至極満悦そうな豪傑笑いになって、「日本  
六十余州を残らず攻め取る子供達だ、そのくらいのこと  
はあるだろう」

その子供らが、ようやく次々と寝鎮まると、さすがの父  
も、

「もうこのくらいで、子供は要らぬ」

御覽の通り、わが家の自慢は子供である。人並みと云つて悪かったら、先ずまあ動物並みの発育は遂げているに相違ない。まさか余生を子供らに頼むつもりは無いのだから、それぞれ、勝手放題に生きてくれれば父は至極満足だ。それには、犬の餌、猫の餌、鶏の餌、金魚鉢の腐り水と……何でも幼少から、喰い馴れ、飲み馴れていてくれる方が、イザと云う時のもち耐えに役立つかも知れぬ。父は自分の生き方だってお先まっ暗の思いである。とても子供らの半生の責任までは負いかねる。そこで安吾の「親が無くても子は育つなんてもんじゃないや。親が有っても子は育つですよ」の主旨に思いっきり賛同して、親の義務をあ

らかた天に奉還したい気持なのである。

八月の五日に、ちょっと東北の四倉近在の山の中まで、人と会いにゆく所用があった。例によって、日頃怠け放題の父は、二三日家をあげるとなると徹夜で片附けなければならぬ仕事がある。いつもながら憐れなわが家の主婦は、自分の怠慢でもないことに、お附合いの罪亡ぼしで、やっぱり徹夜ということになるようだ。

その仕事は、朝のしらじら明けに、やっと一息ついた時である。

「今日思い切つて搔爬しに行こうと思つているんですけど……」

「何、また妊娠？ 四月に流産したばかりじゃないか？」

「ええ、でもツワリがはじまつたようですから」

自分から搔爬しに行くと言ひ出すなんて、自然派のこの母にしては突飛きわまる申し出だ。いつも肝腎な妊娠ですら云いまざらわして、中絶しようにも、六ヵ月、七ヵ月、とつくに時期を失つてしまつているのがきまりである。それ迄はお腹がいくらふくれてきたって頑強に妊娠を否認する。だから熱海での思いがけない流産も、まるっきり妊娠してないものが流産したという奇ッ怪な出来事の一つであった。それを自分から妊娠中絶を申し出るとは、私にしてみれば不思議を通り越している。つまりは自然派の細君もようやく老いたのであらうと私は妻を顧み、

「何も旅行中に搔爬しなくつたつて、オレが帰つてきてか

らではどうだ？」

「ええ、それでもよろしいですけれど」

私はこぶかく茂り合ったわが家の乱雑な木々の有様を今更のように振りかえって、自分の家を後にする。

暑い旅であった。しかし訪ねる人は、その昔満洲の馬賊であり、自然と馬賊にたどりつくその道行の素朴な話が、馬鹿におもしろかった。敗戦と一緒に帰農して、丁度十年がかりでここを開墾したと、風のよく吹き通す奥山の南斜面に立つて見せたが、蒟蒻のまだらの茎と、唐モロコシの葉々と、こもごも、光の中にさやぎ合う色が実によかった。私は久方ぶりにモチキビの天然の甘味をむさぼり喰うのである。老人は夏の炉辺でしきりに手真似などをくりかえしながら、馬賊が民家を襲撃する時の号令だとか云って、『チャンヨー（傭家）』と唱えてみたり、同じく引揚号令だと云って、『ホアー』と唱えてみたり、その度に子の無い森閑とした山の小屋が低くブルブルと家鳴りして、瞬間老人の眼にあやしい昔の炎が燃え出すように思われる。

青年の日は馬賊、年老いて故郷の山に還り黙々として土塊を打っている……、その老人の帰農の感懐もバカに面白かった。ひとごとには思われない。私は唐モロコシの実を、甘くまんべんなく齧りとりながら、炉の方にさし出された老人の節くれだった手を、今更のようにいつまでもジッと眺めて見飽きなかった。

二泊三日。上野には丁度日暮れてから着いた。車窓から

東京のネオンを眺めるまでは、現代の娯楽先生も何となくしぶとい己の月の在処をでも見たつもりで、ネオンよりは空の稲妻、メロンよりは唐モロコシ、クラッカーよりは蒟蒻の肌のブツブツと、何やら古めかしい人間復興の護符をでも得たつもりで、かりにも浮薄な酒色にうつつをぬかすことは自分でもなさそうに思われたのに、街の灯を眺めたトタンにしびれるほどその街の灯恋しい。

誰だって弱いのだ。現代のひよわな文明をことごとく身にあつめて、ドブドロの中にいかりこんで死んだって、自分の中に脈搏っている亡びやすい情を、亡びやすいままに、今日に賭けるのがどうして悪かろう。

帰りついたのは午前四時だ。

「まあ、今頃……。いつでもお留守の時で嫌ですけど、次郎が何だか悪いんです」

「次郎？　それで、医者には見せた？」

「はい、見せました。何とも仰言いませんけれど、扁桃腺もはれているんですって」

私はよろけながらその次郎を電燈の光の中にすかしみたが、酔った頭に、何の思慮も浮ばない。蚊帳の裾から手をだけさし入れて、歯を喰いしばったような次郎の額をさぐってみた。燃えるように熱い。

「扁桃腺だろう。何しろこう暑くっちゃ、大人だって参る」

細君と子供をその蚊帳の中に残し、自分だけひどく空虚

な酔いに揺ぶられるようにして、新築の離れの書齋にひきとった。朝の蟬が啼きしきっているのである。

醉生夢死。それをとりたてて罪惡だなどとは思わない。警醒の偉人の声も、いづれはこの啼きしきる蟬のなかの、少しばかり調子のはずれた蟬ぐらいのものだろう。人間から聞いてみれば、ただ一色、真夏の日盛りのはかない夢でないものが一匹でもあるか。

まるで炎暑を抱きよせるようにして、昏々と眠り込んでいる。が、ようやくゆすぶり起されていることに気がついた。

「ちよつと、起きて見て下さらない。次郎がひどく悪いんです。ひきつけているんです」

「医者と呼んだ？」

「はい、お医者様は呼びにやっておりますけれど……」

私はまだ醒めきらぬ酔いをひきずるようにして、母屋の廊下から匍い上る。女中が次郎を抱えとっていた。シャモジにタオルをぐるぐる巻きにして、そのシャモジを口にくわえさせられている。いや、喰いしばっていると見えた。奈落の果を泳いでいるように見える。

「次郎。次郎」と大声をあげて呼んでみたが、全身の痙攣だ。額に押しつけている水囊の下に、もがいている。折からの正午の照り返し、と、木の葉の反射を浴びて、青ざめくねっているその次郎の姿が、何か新しい野獣の精氣をも帯びているように私には感じられた。医師が来る。

「すぐ、何処かにお心当りの病院に入院させていただきましようか」

「どんな状態でしょう？」

「さあ、項のところに硬直が来ておりませんから、今のところ日本脳炎でもなさそうですが、二三日で熱が下って麻痺が来れば小児麻痺……脳膜炎……ハッキリわかりませんが、やっぱり入院させていただきましようか？」

すぐにタクシーを呼んだ。ツワリがひどくこの十日余り、寝たっきりの細君をやるのは気の毒だが、私は連載の新聞小説を切るわけにはゆかぬ。病院は、細君が次郎、弥太、フミ子とつづけて三人を分娩した聖母病院が馴れている。万事都合だと思つたから予め電話をかけさせた。先方は、

「伝染病ではないでしょうね？ 伝染病は預かりませんよ」

と云っているようだ。それがわからないから取敢えず連込むわけである。二人の重病患者が固く抱き合うような恰好で、母と子は、自動車に乗って出発していった。

原稿が手につかないでいるうちに聖母病院から電話だと云っている。

「もしもし。あの——次郎は、日本脳炎だそうでした。ここでは預かれないと仰言るんですよ。それで豊多摩病院に移していただくことになりました。唯今、病院のお迎えの自動車が来る迄待つておりますが、原稿が済みましたら、直接向うの病院に来て下さいませんか」



細君の心細げな狼狽の声が聞えている。私だつて動揺した。日本脳炎とはいかなる奴か？ 兵隊の頃、久留米の界限で、炎天の行軍から帰りついた兵士らがバタバタと倒れたと思つたら、それが日本脳炎で、大半は死んだと云う記憶がある。いや、その兵士らの噂より、外出禁止を命じられた兵営内のうらめしい鬱憤の追憶だろう。

病気にはさまざまあるが、自分の家族に日本脳炎が発生しようなどとは、迂闊にも今日まで一度も考えてみたことが無い。

子供はほつたらかせば育つ。現に私は浮浪児同然、ほつたらかされ続けて育ってきたやうなものだ。

私は自動車を呼んで残りの子供らを全部のせ、さながら物見遊山のふうにそのクルマを走らせて、病院近い友人の家に子供らを預けると、自分一人、避病院の門をくぐつた。

嚴重な消毒だ。そここ上ったり降ったりするコンクリの廊下である。もうとつくに日没は終っているが、裏町の路地でもあるように、その廊下にチョロチョロと子供らが走り、窓際に浴衣の老人や、エプロンのおかみさん達が涼を入れている。

部屋はすぐわかった。八畳ぐらいの病室に寝台が三つ（縦に二つ、横に一つ）据えられて、そのハザマのところに板を敷き、蒲団を展べ、附添いの家族らが思い思いに坐っていた。つきあたって左手に二十歳ぐらいの青年だ。附

添いは妹さんだろう、浣团扇で患者の胸許をひっきりなしにあおいでやっている。

「痛いよう、痛いよう」

「そんなことを云つたって……」

と患者の大声に気がとがめるのか、その附添いの妹は水囊を押えながら、こちらをぬすみ見る様子である。

その右の寝台は三四歳の子供だが、もうまるっきり病氣の様子には見えず、寝台からすべり降り、ハザマの蒲団に坐っている附添いのおッ母さんの膝の上に馬乗りになって、おッ母さんの乳房をひきずり出している。

「ええ、ウチの子は脳炎じゃなかったのよ。熱が高いでしよう、泡を喰っちゃって、ここへ連れこんできたんだけど、三日目からケロリなのよ……」

私はあらためて次郎を見たが、まわりの喧騒など何も知らぬげで、昏々と睡りつくしているように見える。熱は四十度六分。

「オマエさん大丈夫か？ 今夜の附添いは」

「ええ」

「附添いの看護婦さんをお呼びがいいが、今夜はとても駄目だろう」

「いいえ、ズツと私大丈夫」

私はこの部屋には思いがけぬ親近をすら感じたけれど、今日までずっと寝込んでいた細君だ。次郎よりその母の方が参りそうで不安だが、しかしほかに適当な方法が考えつ